

藤原清衡論 (上)

樋口知志

目次

はじめに

一 生い立ち

二 前九年合戦

三 清原氏の人として

四 後三年合戦 (以上本号)

五 あやうい政治的立場 (以下次号)

六 三人の陸奥守―源有宗・藤原実宗・藤原基頼―

七 平泉開府

八 仏教文化

九 晩年期

おわりに

はじめに

藤原清衡 (一〇五六―一一二八) はいわずと知れた奥州藤原氏の初代であり、平泉の地に開府を果たして奥羽両国に覇権を樹立し、八〇余年続いた絢爛豪華ないわゆる平泉文化の礎を築いた人である。

清衡が出生した天喜四年 (一〇五六) という年は前九年合戦 (一〇五一―一六二) の最中であり、康平五年 (一〇六二) に同合戦が源氏・清原氏連合軍の勝利、安倍氏の「滅亡」というかたちで終結したとき、彼は実父の経清を失っている。その後、奥六郡主安倍頼時の娘である彼の母は清原武則の長子武貞の許に再嫁し、清衡も母の連れ子としてともに清原氏の人となった。彼はその後清原氏の一員として少年・青年期を過ごす、永保三年 (一〇八三) に勃発した後三年合戦 (一〇八三―一八七) では清原氏当主の座にあった異父異母兄の真衡や異父同母弟の家衡、オジの武衡と戦い合い、合戦終結後は清原氏嫡系男子としてたった一人生き残った。かくして奥羽の二大戦乱を生きぬいた清衡はその後弛まぬ歩みを続け、十二世紀初頭頃にはついに平泉開府を果たしたのである。

本稿では、そのような数奇な生い立ちと前半生をもつ彼の人生の軌跡について、文献史料の精確な読み直し作業に立脚しつつ、あらためて根本から再考してみたい。というのは、彼の生涯についてはこれまで諸先学によって数多く論及されてきたものの、¹⁾ 巷間に流布している通説的見解にもあるいは史的事実に反する誤謬が少なからず含まれているのではないかと愚考されるからである。

平泉の世界遺産登録のことが頻繁に話題とされ奥州藤原氏に関わる平安末期の文化遺産に熱い視線が注がれている昨今であるが、近年そうした動きとも連動するかたちで、前九年・後三年合戦期や奥州藤原氏の時代に関わる諸遺跡の発掘調査が進められて考古学的知見がいくじるしく増大し、また歴史学 (『文献史学』) の側においても『陸奥話記』『奥州後三年記』や『吾妻鏡』といった関連する諸文献の史料批判や読み直しにもとづき基礎的研究の拡充が図られるなど、かなりの研究成果の蓄積がみられた。本稿ではそれら数々の新たな成果を踏まえながら、奥州藤原氏初代清衡の全生涯について、時代の趨勢やその変

遷との関連をも重視しつつできるかぎり詳細に論じてみたい。

もしも本稿における所論の中に、今後の奥羽の古代・中世史研究や平泉文化研究の発展にいさかなりとも寄与するところがあると思えば、まさに望外の幸いという他ない。

一 生い立ち

藤原宗忠の日記である『中右記』の目録中の大治三年（一二二八）七月二十九日条に、「去十三日、陸奥住人清平卒去云々。^{三七}」と所見しており、清衡は同年七月に七十三歳で死去したことが知られる。ただし彼の命日については異説があり、妙法蓮華経、卷第八、奥書（高山金剛峯寺藏紺紙金字法華経、『平泉町史』史料編一、13号）には、「大治三年^{戊申}、八月六日、平氏為『藤原清衡尊当三十七日、一日之内書寫了。』とみえていて、彼の嫡妻北方平氏が夫の死去から二十一日目の八月六日にこの経巻を書写し終えたこととから逆算すれば、彼の命日は七月十六日となる。二つの史料の信憑性を比較すれば、明らかに後者の所伝の方がより正確であろうと推測される。しかしながら、ここでは前者に注記されている彼の没年齢が重要な手がかりとなる。清衡の没年齢を記した同時代文献は他になく、これが正確なものであるとみられるとすれば、彼の生年は「はじめに」にも記したとおり天喜四年（一〇五六）であったことになる。

彼の父が、前九年合戦において安倍氏方に立って戦い凄惨な最期を遂げた藤原経清であったことはよく知られている。後三年合戦の顛末を描いた戦記物語である『奥州後三年記』（以下『後三年記』と略称）に、「清衡はわたりの権大夫経清が子なり。」と所見しており、清衡の父経清は陸奥国のいわゆる在庁官人として亘理郡を領した辺境軍事貴

族であったと考えられている。^② 経清は陸奥国内に住み着き、その後奥六郡（伊沢・江刺・和賀・稗拔・志波・岩手の六郡）を支配下に置く在地豪族安倍氏の当主であった頼時（永承六＝一〇五一年頃に頼良より改名）の娘婿となった。

経清は藤原氏の中でも武門の名族として著名な秀郷流（承平・天慶の乱で平将門を討ち取ったことで有名な藤原秀郷を始祖とする）の血を引いており、『尊卑分脈』には秀郷―千晴―千清―正頼―頼遠―経清と彼が秀郷の六代目の子孫であったことを示す系図が掲げられている。また『造興福寺記』永承二年（一〇四七）二月二十一日条の記すところによれば、同年に彼が藤原氏の氏人として同氏の氏寺である興福寺の再建のために貢献をおこなっていることも確認でき、また記事中で彼の名に付された「六奥」の注記から、彼がその頃にすでに陸奥国内に在住していたことも知られる。^③

なお『尊卑分脈』によれば経清の祖父正頼は「從五^下下野守」、父頼遠は「下総国住人五郡太大夫」と所見し、いずれも陸奥国の人ではなかったとみられるので、陸奥へ下向したのは彼の代のことであったと思われるが、その時期はいつだったのか。『陸奥話記』（以下『話記』と略称）の文中には、源頼義が経清を処刑する際に彼に向かって「汝先祖相伝、為^三予家僕。而年来忽^三緒朝威、蔑^三如旧主、大逆無道也。」と言っている部分があるが、従来にも指摘があるように、すでに彼の父か祖父が平忠常の乱（一〇二八―一〇三二）の最中の長元三年（一〇三〇）頃に頼義の父頼信に臣従したと考えることができ、だとすれば頼信の次子頼清（頼義の弟）が陸奥守として赴任した長久年間（一〇四〇―一〇四四）に、経清は国守頼清の郎等の一人として主君とともに陸奥へ下向したのではなかろうか。^④ また経清という名も、あるいは主君頼清より一字を拝領して本来の名より改名したものであったのかもしれない。

それでは、経清が清衡の母となった安倍頼時（頼良）の娘を娶ったのはいつのことであったのか。彼女が清原武貞に再嫁した際の連れ子の男子は清衡一人であつたらしく、清衡が彼女の第一子であつた可能性がわりあい高いように窺えること、康平五年（一〇六二）以降に武貞の許に再嫁し、彼との間に家衡を産んでいることの二点から推察するに、経清の許に嫁したとき彼女はかなり年若く、おそらく最初の婚姻の時期は清衡の出生年をあまり遡らない頃であつたとみるのが自然であろう。また源頼義が突如安倍氏に攻撃を開始し、両者間で戦端が開かれたのがまさに清衡が出生したその年のことであつたことを併せ考えるならば、あるいは経清と安倍氏とが姻戚の誼を結んだのがその少し前のことであつて、そのことが源氏・安倍氏間の合戦勃発の一因をなしていたということも、あながち考えられないことではない。

ところで、清衡が出生した頃、父経清はもうかなりの年配であつたと推測される。というのは、先に触れた『造興福寺記』の記事によれば、永承二年の時点で彼はすでに五位を得ていたことが知られるからである。この位階は中央においてはさほどの高位ではないが、地方在住の人にとってはかなりの長期間にわたる年歴を積みねば一般的に到達が困難なものであつたと考えられるから、もし最大限に若くみたとしても、すでにその時点で三十歳代には達していたのではないかと思われる。とすれば、清衡が生まれた天喜四年の時点では四十歳を超えていた可能性が高く、あるいは五十歳に近い年齢であつたのかもしれない。経清と清衡とはかなり年の離れた父子であつたのである。

鎌倉時代後期に制作されたとみられる『前九年合戦絵詞』（五島美術館蔵）には、笠を目深に被つた経清と平永衡が互いに向かい合つて立っている姿が描かれている。⁶ 清衡が生まれた年である天喜四年、源頼義が安倍氏に攻撃を仕掛けた直後の場面として描かれた絵であるが、そこに描かれた経清の風貌は下ぶくれで口ひげ・顎ひげを蓄えやや肥え

た恰幅のよい中年男性のそれであり、およそ若年の父親の姿にはみえない。前九年合戦よりも二百年近くも後世に描かれた絵であるので史料としての信憑性は決して高いとはいえないが、それなりの参考にはなるであろう。

さて、一方清衡の母は前述したように安倍頼時の娘であるが、前九年合戦の終結後にまだ幼い清衡（合戦が終結した康平五年の時点で七歳）を連れて、清原武則の長子武貞に再嫁する。この婚姻の実態について巷間では、戦勝者による美女掠奪であつたとか、極端な説においては奴隸なみの哀れな辱めを受けたのではないかなどと、さまざまな臆測もおこなわれてきた。また前九年・後三年合戦や奥州藤原氏の研究で先駆的な業績を挙げた高橋富雄氏は、著書『藤原清衡』の中で次のように述べている。

『陸奥話記』によると、厨川落城のさい、城中では着飾つた美女たち数十人がとりこになつた。頼義は、この女たちを、生ける戦利品として、手がらのあつた勇士たちに対して、それぞれに恩賞として分ち与えた。おそらく、そのなかに経清の妻もいたのである。そして拝領第一号として、清原軍第一陣の押領使清原武貞に与えられたのである。武貞は武則の子で早く妻を失つていた。頼義にしてみれば、戦利品の分配にすぎなかつたのであるが、武則・武貞らには、これは、安倍氏の遺産をつくものとしての生けるしと考えられたであろう。（中略）清原氏にとっては、かの女は藤原経清妻ではなくて、安倍頼時女であつたのである。（中略）母として、主婦として、どのような日々をこの安倍氏女が送つたかは、想像するよりほかないのであるが、おそらく小説よりも奇なる茨の道であつたろうと思われる。⁷

もしも清衡の母が高橋氏のいうように「生ける戦利品」として清原氏に嫁がされたのであれば、清衡の少年期は彼にとってきわめて悲惨

で残酷な暗黒の時代ということにならざるをえない。しかしながら、私は真の史実はそうした想定とはまったく異なるものであったと考える。

これまでは清衡の母が安倍頼時の娘であるという一面ばかりが強調されてしまっており、彼女の母の血統について考えられることはほとんどなかった。結論から先というならば、彼女の母は頼時の嫡妻の座にあった清原氏の女性であったのではないかと推測される。

頼時の嫡子格の地位にあったのは三男の宗任であり、また五男の正任と宗任とはおそらく同母の兄弟であったと推測され、ともに清原氏とは女系親族の関係にあった。⁹なお頼時の子息には宗任・正任のように清原氏と女系親族関係にある男子と次男貞任・八男則任のように磐井郡の金氏と女系親族関係にある男子とがあり、清原氏と金氏が当時安倍氏にとつての二大姻戚氏族であったと理解できるが、家柄からみて清原氏は金氏よりも圧倒的に優位であるとみられる点から、おそらく頼時の嫡妻は清原氏の女性であつて（前九年合戦時の清原氏の当主光頼の妹あるいは娘か）、宗任・正任はともにその所生子であつた可能性が高い。

そのように考えたうえで清衡の母についてみるならば、彼女の夫経清と宗任との間にかなり親密な関係があつたらしい点にとくに注意を惹かれる。すなわち『話記』によれば、経清・宗任ともに衣川関（岩手県奥州市衣川区）よりも南方の磐井郡以南の諸郡に強い影響力をもっていたことが窺えるのであり、また康平五年九月七日に衣川関が陥落した後には二人連れ立って鳥海柵（同金ヶ崎町）を退去し、貞任が守る厨川柵（同盛岡市）へ向かつており、経清と宗任とが頻繁に行動を共にしていたことを思わせる。そうした点は、経清の妻と宗任が親密な骨肉の情によって固く結ばれていた同母兄妹であつたためであると考ええると、非常に理解がしやすいのである。

また前九年合戦よりも半世紀くらい後のことであるが、清衡の子息基衡が宗任の娘（平泉親自在王院の主）を娶つて嫡妻としていても、そもそものは清衡の母方の祖父母の血筋がとりもつ縁であつたのではなからうか。

おおよそ以上のように考えられるとすれば、前九年合戦終結の際に清衡の母が戦場で掠奪されて清原氏の虜にされたなどとはいささかも考えがたい。真実はそうではなくて、彼女は自分の母の出身氏族であつた清原氏に迎え入れられたのであると考えられる。

しかしながら、そうは言つても彼女にとつて武則・武貞父子は源氏に加勢して安倍氏を攻め、夫を死に追いやった側の人間である。少なくとも当初、彼女がやりきれない悲しみに打ちひしがれていたことは確かであろう。だが実際には、清原氏の側に経清を亡きものにする意図はなく、おそらく武則は、清原氏嫡流の血を引く女性の夫であり、宗任とも親密な関係にあつた経清のこともできるならば助けたかつたのではなからうか。だが経清は結局、頼義のあまりにも激しい怒りを買つていたために無慚な最期を遂げる他なかつたのである。

清衡は、軍事貴族秀郷流藤原氏の経清を父にもち、一方では母を介して奥六郡主安倍氏の嫡流と出羽山北主清原氏の嫡流とを享けていた。そうしたきわめて特殊な血統ゆえに、まだ幼少に過ぎなかつたにも拘わらず、彼は否応なしに前九年合戦の惨禍に巻き込まれていかざるをえなかつたのである。

二 前九年合戦

先にも触れたように、清衡が生まれた天喜四年（一〇五六）という年は前九年合戦期の最中であり、しかも戦いに大きな動きのあつた年

であった。『話記』の記述を参考にするならば、戦乱のそもその発端は、永承六年（一〇五一）頃に当時の陸奥守藤原登任と奥六郡主安倍頼良との間で発生した武力衝突事件にあったようであるが、同年に新たな陸奥守となった源頼義が下向した後は暫くの間、源氏と安倍氏との関係は表面上は良好であったらしい。また安倍頼良は国守頼義に恭順の姿勢を示し、頼義と同名（いずれも音はヨリヨシ）であることを憚って、自ら頼時と改名するほどであったという。

ところが、天喜元年（一〇五三）に陸奥守頼義が鎮守府將軍を兼任したあたりから、徐々に両者の関係に齟齬が生じてきたように推察される。鎮守府將軍とは古代より蝦夷の地を武威によって治めるべく陸奥国に置かれた軍政府である鎮守府の長たる武官であるが、この官はかつて長元元年（一〇二八）頃にひとたび事実上の廃止をみている。すなわち、十一世紀の初頭頃より陸奥守と鎮守府將軍という陸奥国内の二大巨頭の間で北方諸産物の奪い合いに起因するとみられる激しい争いが頻発し、そうした事態に対して国家政府は両者の政治権力の一体化を図るための政策を推進、結果として鎮守府將軍が現地不在とされ、鎮守府政は陸奥守の指揮下に鎮守府在庁筆頭である奥六郡主安倍氏が在庁官人らを統率しておこなうこととなったのであった。またそうした国家側の政策を実現すべく貢献し奥六郡支配の安定化に大きく寄与したことへの恩賞として、頼時の父である奥六郡主安倍忠良（好）は長元九年（一〇三六）十二月二十二日に陸奥權守に任じられたのである。

右のような事情によって、いわば古代の蝦夷問題が終焉を迎えたことを背景として事実上廃止された鎮守府將軍が、その四半世紀後になつて陸奥守頼義が兼官するかたちで復活させられたのはいかなる理由によるものであったのか。それはやはり、頼義の心中に安倍氏を討ち滅ぼそうとする野心が頭を擡げつつあったことと無関係であったと

は到底思えず、鎮守府將軍復活が頼義による積極的な働きかけによって実現したものである可能性はきわめて高い。陸奥守頼義の鎮守府將軍兼任は、もちろん安倍氏の側にも相当の緊張や警戒心を喚起したことであろう。

そして、頼義が陸奥守を任終となる天喜四年、鎮守府（岩手県奥州市水沢区に所在したか）に赴き鎮守府將軍としての政務を執った直後より、両者の関係は急激に悪化していく。『話記』によれば、府務を終え国府への帰途についた頼義の一行が阿久利河（所在不明。物語上の架空の川である可能性もある）という川の畔で野営した晩に、頼時の子息貞任が頼義の郎等の宿営を襲撃して人馬を殺傷する事件を起こし、それが発端となつて源氏と安倍氏との合戦へと導かれていったように記されている。この阿久利河事件の実否をめぐっては大きな問題があり、私見ではこれが丸ごと『話記』作者によつて捏造された虚構である可能性が高いように考えられるのであるが、しかしながら天喜四年という年が、源氏と安倍氏との間の合戦を引き起こすきっかけとなった何らかの「事件」が生じ、両者間に戦端が開かれた年であったことは、ほぼ間違いないであろう。清衡がまさにこの年に生を享けたことは、決して運命の悪戯とは言いい切れないにか深い意味があるように思われてならない。

『話記』によれば、同年頼義が安倍氏を攻めるため衣川に至ろうとした折、経清と同じく安倍頼時の娘を妻としていた平永衡が敵方への内通の嫌疑をかけられて陣中で処刑された。そしてそれをみた経清は、永衡と同様の立場にある自分も肅清を免れないであろうと考えて、私兵八百余人を率いて頼時の許へ走ったとされている。しかしながら、同書のそのくだりは中国古典籍の故事が不自然なほど多用されているうえ、文章中に作家的な痕跡がめだち、作者の手による創作にかかる可能性が高く、およそ史実であるとは認めがたい。永衡処刑の一

件は一応史実であるのかもしれないが、経清が安倍氏方についた理由が同書に説明された通りのそのままであったとはまず考えがたいであろう。

前節で指摘しておいたように、経清は本来頼義の弟である前陸奥守頼清の郎等であつたと考えられるが、彼とその家族は主君の帰京後も陸奥に留まつた。頼清の後任の陸奥守になつたのが藤原登任で、永衡はその郎等であつたが、『話記』によれば永衡は登任より伊具郡を拝領したにも拘わらず、永承六年の合戦では主君に敵対して安倍頼良についたという。その点の真偽は定かではないが、おそらく永衡は経清に先んじて永承六年以前に安倍氏と姻戚関係を結んでいたものと考えられ、経清は自らの領する亘理郡に隣接した伊具郡に勢力を張る永衡を紹介して頼良に接近していったのではなからうか。そして天喜年間に入つてから、彼は頼時（＝頼良）の嫡女を娶つたのであろう。

源家相伝の「家僕」であつた経清が主家より離反して頼時方についたことの真意は十分にはわかりかねるけれども、推察するに、永衡への同情などもあるいはあつたのかもしれないが、やはり奥六郡主安倍氏・出羽山北主清原氏の両嫡流の血統を享けた妻の存在が彼にとって存外に重い意味をもつていたのではないかと思われる。すなわち経清は彼女の存在を介して、奥六郡主・出羽山北主という北奥羽における正統的な政治権力と深く誼を交わすこととなつたのであろう。北奥羽在地社会における政治秩序の頂点に君臨する奥六郡主・出羽山北主こそがそこではまさに「正義」の体現者に他ならなかつたのであり、陸奥国の住人として生きる道を選んだ経清がそうした観念に強く影響されたとしてもとくに不審ではない。しかし彼の悲劇はその先に待っていた。彼は在地社会における政治秩序と主家の命との間に板挟みとなり、ついには姻族安倍氏を扶けて主家に叛く道に進まざるをえなかつたのである。

さて、源氏と安倍氏との戦いがきわめて激しいものとなつたのは、清衡が誕生した翌年の天喜五年（一〇五七）の頃からと思われる。頼義は、気仙郡司の金為時と下毛野興重に命じて、青森県東部地方に勢力を張っていたとみられる奥六郡安倍氏の同族である安倍富忠の軍勢を挙兵させ、頼時らを攻めさせようとした。為時・興重の懐柔によって源氏方に立つて挙兵した富忠に対して頼時は説得に赴こうとするが、その途次で富忠軍の伏兵による攻撃を受けて重傷を負い、鳥海柵に帰還後の同年七月八月頃¹⁵に死去した。

頼時を討ち果たすという予想外の戦果を得た頼義は、そのことを自らの手による叛逆者掃討作戦の成果として朝廷に向けて盛んに宣伝し、強引な政治工作によつてあるうにか安倍氏を叛逆者に仕立て上げ、「追討宣旨」まで手に入れた。一族の長頼時を殺されたばかりか、叛逆者の汚名まで着せられた安倍氏は、ここに源氏を敵として対峙することとなつたのである。

同年十一月、頼義率いる源氏軍千八百余と頼時の次男貞任率いる安倍軍四千余とが、磐井郡黄海（岩手県藤沢町）にて激戦を展開した。また同年十二月二十五日の除目（『扶桑略記』同日条）において頼義は再び陸奥守に任じられ（頼義は天喜四年中に陸奥守を任終となり、その後は鎮守府將軍であつた）、¹⁶彼が推進する安倍氏追討の軍事行動に對する中央政府の支持・追認はより一層確実なものになつていった。

しかしながら、その後の情況は頼義の思惑を全く裏切るものであつた。頼義の安倍氏追討に協力させるべく新たな出羽守とされた源齊頼が全然頼りにならぬばかりでなく、他国からの援兵・兵糧も届かず、さらには国内の民の兵役拒否をも抑えることができず、安倍氏追討の準備すらできないままいたずらに年月が過ぎていった。それはおそろしく、頼義を孤立させ追討を妨害することで安倍氏を守ろうとする頼義包囲網が、奥羽両国の広範な人々によつて形成されていたことによる

ものと考えられるのであるが、奥六郡主安倍氏の姻戚氏族であった出羽山北主清原氏もまた、当初はそうした勢力に同調的な姿勢を示していたのではないかとすら疑われる。

その後陸奥守の再度の任期切れを目前にした頼義は、最後の手段として出羽山北主清原氏に加勢を願ひ出た。当主の光頼と弟武則は回答の先延ばしを重ねた挙げ句、最後にぎりぎりのタイミングで援軍要請を受諾した。そして陸奥守が頼義より高階経重に交替した康平五年（一〇六二）の八月に源氏・清原氏連合軍は安倍氏北伐を開始、一ヶ月におよぶ激戦の末、同年九月十七日、奥六郡安倍氏はいよいよ岩手郡厨川・姫戸柵において敗れたのである。

ここで最大の問題となるのは、清原氏が旧くより昵懇の間柄であったといっても過言ではない姻戚氏族安倍氏への武力行使に踏み切ったことの理由であろう。

別稿で論じたように、康平五年合戦とともに手を携えて安倍氏を攻撃したものの、源氏と清原氏とではそもそも安倍氏と戦闘を交えることの動機がまったく違っていたものと考えられる。¹⁸ すなわち頼義にとっては貞任への言いがかりを口実に安倍氏を滅ぼそうとする戦いに他ならなかったが、一方頼義に与力した清原氏にとっては実は安倍氏そのものを滅亡に追い込む意図はなく、清原氏の女系親族で本来安倍頼時の嫡子格であった宗任の地位を脅かすほどのカリスマ性と軍事的実力を獲得しつつあった貞任とその一家を滅ぼすことにこそ真の狙いがあったものと推察される。そのことを傍証するような逸話が『話記』中にある。厨川柵における最後の戦闘において、僅か十三歳の「容兒美麗」な若武者であった貞任の子息千世童子のけなげな戦いぶりに心打たれた頼義が哀憐して命を助けようと思ったところ、武則が「將軍莫思下中小義上忘中後害上。」と意見し、千世童子を斬らせたというのである。

一万余の大軍を率いて参戦した武則ら清原氏側の本意は、頼義による安倍氏攻めに便乗することで貞任ら安倍氏一族内に巢食う「獅子身中の虫」の退治を執行し、合戦終結後には宗任を擁立して清原氏の後見の下に安倍氏本宗を継承させようとするものであったと考えられる。事実、合戦後宗任・正任ら清原氏と女系親族関係にあった頼時の子息はみな生き残ったし、また頼時の嫡妻であった清原氏の女性を母とする経清の妻も子息清衡とともに清原氏によって保護されたのである。実に前九年合戦最終段の康平五年合戦とは、源氏と清原氏両者の互いにまったく異なる思惑が奇妙な結合をみたことによって勃発した戦乱であったのである。

清衡の父経清のことに話を戻す。『話記』によれば経清は、天喜五年十一月の黄海合戦の後、数百の兵士を率いて衣川関を出て、奥六郡より南の諸郡（主に磐井・栗原・登米の三郡か）の官物を徴納させる際に、「可レ用二白符一。不レ可レ用二赤符一。」と使者らに命じて、国印が捺されていない「白符」（経清の私文書）を発給し、陸奥守頼義の權威を蔑ろにしたという。彼はかつての主家と真つ向から対決しようとする強い意志を抱いていたように窺われるのであり、おそらくその後も安倍氏方の客将として戦乱の渦中にあり続けたであろう。だがついに武運尽き、康平五年九月十七日に厨川・姫戸両柵が源氏・清原氏連合軍の攻撃によって落城した折に、彼は貞任・重任（頼時の六男）らとともに捕らえられて斬殺された。経清は頼義にきわめて激しく憎悪されていたようで、鈍刀にてゆっくり時間をかけて頸を切り落とされるといふ残忍きわまりない方法で処刑されたことはあまりにも有名である。安倍氏が敗れ父経清が刑死した頃、清衡はまた七歳の幼子であった。頼義にそれほどまでに激しく憎悪されていた経清の実子である彼が戦後も生き残ることができたのは、いかにも不思議なことであるといわねばならない。おそらく頼義は幼い清衡の存在を知らなかったのでは

なからうか。もし知っていたならば、どこまでも所在を突き止め殺害を執行したであろうと思われるからである。清衡が出生したのが、源氏による安倍氏への攻撃が始まった年であったことも、一つの臆測を生じさせる。すなわち清衡は出生の後、秀郷流藤原氏・奥六郡主安倍氏・出羽山北主清原氏の三氏の正統を嗣ぐ「貴種」として安倍一族内で手厚い慈育を受け、またその身を守るために戦乱の最中も彼の存在は族外に対して長く秘匿されていたのではなからうか。あるいは康平五年合戦の折にも、彼は母とともに戦場となった安倍氏の諸柵にはなく、どこか人里離れた閑居に隠棲していて、武則らは頼義に悟られぬよう密かにそこへ赴き母子の身柄を保護したのではないかなども臆察されよう。

前九年合戦をめぐる考察の最後に、清衡の異母兄かとみられる人物についての管見を述べておきたい。清衡の兄弟といえ、まず頭に浮かぶのは異父同母弟の家衡と、武貞の子で父母ともに異なる兄真衡の二人であるが、実は彼には真衡よりも年長とみられるもう一人の兄がいた可能性がある。そう思われる人物の名は、『話記』中に引用された康平五年十二月十七日陸奥国解に所見する。

同十二月十七日国解云、「斬獲賊徒安倍貞任・同重任・藤原経清・散位平孝忠・藤原重久・散位物部維正・藤原経光・同正継・同正元・帰降者安倍宗任・弟家任・則任^{出家}・散位安倍為元・金為行・同則行・同経永・藤原業近・同頼久・同遠久等也。此外貞任家族無^有遺類」。但正任一人未^三出来」云々。

右の史料では、斬獲賊徒の名の中に安倍貞任・同重任・藤原経清らと並んで、藤原経光という経清と一字違いの人名がみえる。前述のように経清は、清衡が出生した頃にはもうすでに四十歳代に達していた可能性が高く、康平五年の死去時にはだいたい四十歳代の後半から五十歳代くらいの年齢であったかと思われる。清衡の母との結婚が初婚

であったとは到底思えず、またそのくらいの年配であれば、康平五年合戦の頃には、彼を助けてともに戦った子息がいたとしてもなんら不思議ではない。あるいはこの経光こそが彼の実子ではなかったろうか。

また『尊卑分脈』にも、経清には清衡の他にもう一人子息がいたように記されていて、その名は「経元」とされている。清衡の母と経清との間に清衡以外にも男子がいたとは考えにくく、すると「経元」は彼の異母兄弟ではないかと考えられるのであるが、面白いことに「元」と「光」とはくずした時の字形がわりあいよく似ており、いきおい『尊卑分脈』の「経元」は「経光」の誤記か誤写ではなかったかと強く疑われるのである。やはり経清とともに敵方に斬獲された経光という人物は、清衡の異母兄であったと推測してよいのではなからうか。

もしそうであるとすれば、幼い日の清衡にはかなり年の離れた頼もしくも逞しい母違いの兄がいたことになる。あるいは彼は、父とともに戦死したこの兄と過ごした幼い頃の日々の楽しくも切ない思い出を、その後もずっと胸の奥に秘めていたのではなかったか。

三 清原氏の人として

前九年合戦終結後の康平六年（一〇六三）二月、清原武則は安倍氏追討の功によって鎮守府將軍に任じられた。²⁰ そのとき頼義も論功行賞により伊予守に任じられたが、彼はその後一年もの間陸奥に逗留を続ける。おそらく鎮守府將軍となった武則が、宗任を擁立して安倍氏の再興を図ろうとしたのに対して、それを察した頼義は不法な滞在を続け必死に妨害をおこなったものと推測される。そして翌康平七年（一〇六四）二月、意を決した頼義は宗任をはじめとする頼時の五子息を

拉致し、自らに伴わせて上京する。朝廷はそれに押されて、同年三月宗任らを頼義の任国である伊予へ移配することを許可したのである。²⁾

宗任・正任ら清原氏系の頼時男子を頼義に連れ去られた結果、清原氏がめざしていた安倍氏再興計画は頓挫させられてしまう。出羽山北主清原氏当主の光頼と弟武則は、この窮状の打開策について協議を重ねたことであろう。そしてその結果、奥六郡から中央政権への貢賦を途絶えさせぬためにも、鎮守府將軍武則の一家が奥六郡主を継承すべく、本拠を出羽山北より奥六郡へと移すこととなった。武則流清原氏が出羽山北主であった嫡流より分かれて奥六郡主清原氏として独立したのは、まさにこの時であった。

さて、幼い清衡を連れた母は、前九年合戦終結後に武則の長子武貞の許に再嫁するが、その婚姻の時期がいつであったかはよく分からない。頼義は合戦後一年にもわたって陸奥国に逗留を続けていたから、その間には頼義の憎しみの的であった経清の未亡人と遺児を公然と清原氏に迎えることはできなかったのではなかろうか。もちろんその頃すでに武貞と清衡の母とが密やかな新婚生活を送っていた可能性も皆無ではなかろうが、兩人の婚姻が奥六郡をはじめ奥羽の政界や在地社会で公的に認知されたのは、やはり頼義が伊予に向かった康平七年以降のことであったと考えておきたい。清衡が正式に清原氏の人となったのも、おそらくその時点でのことであつたろう。

すでに第一節において、清衡の母は戦場で掠奪されて清原氏の虜とされたのではなく、自分の母の出身氏族である清原氏に迎え入れられたと考えられることを述べた。彼女は奥六郡主安倍頼時の嫡女であり、あまつさえ鎮守府將軍を数多く輩出している武門の名族秀郷流藤原氏の血を引く貴種。清衡の母でもあったから、本来清原氏の庶流の子弟に過ぎなかった武貞にとってはまさに分に過ぎた高貴な女性であつたといってもよい。彼女が武貞の嫡妻として迎えられたであろう

ことは、私にはまず間違いないところであるように思われる。また彼女が清原一族において屈辱的な冷遇を受けるようなことも、およそありうべからざることであつたと断じてよい。

また清衡の母を自分たちの一家に迎え入れることには、武則・武貞父子にとつてもう一つの重要な意味合いがともなっていた。すなわち安倍頼時の嫡女である清衡の母と頼時の外孫で名門秀郷流藤原氏の血を引く清衡の二人は、安倍氏の跡を継いで新たな奥六郡主となった武則流清原氏が、奥六郡の住人たちを従え領内を統治していくためにも、自分たちの側に取り込んで正面に押し立てなければならぬ存在であつたと考えられるのである。また鎮守府將軍を数多く輩出した秀郷流藤原氏の貴種を家族内に取り込むことによって、新奥六郡主武則流清原氏が鎮守府在庁の支配機構を麾下に編制していく上でも大きなメリットが得られたものと推測される。清衡と彼の母の存在は、まさに清原氏が安倍氏の奥六郡支配権を受け継ぐ正統な奥六郡主であることと在地社会に対して示す証そのものに他ならなかったであろう。そうであれば、おそらく清原一族の人々は、彼ら母子をことさらに大事にしていたものと推察されるのである。

ところで、これまで仮に幼少時代の清衡のことを「清衡」と記してきたが、この名は当時の彼の名ではなかったとみられる。前九年合戦終結前までは経清夫妻の許でなんらかの幼名で呼ばれていたと思われる、清原氏の人となつてから元服して実名を名のつたと推察されるのであるが、彼の最初の実名は祖父・継父の名武則・武貞より類推するに、おそらく「武清」ではなかったろうか。後に説明するように、「真衡」「清衡」「家衡」という三兄弟の「衡」字のつく名は、いずれも武貞の死後に彼らの義父となつた貞衡より「衡」字をもらつて名のつた名であると考えられるからである。但し以下の論述では便宜上「清衡」を使用することとする。

清衡が清原氏の一員に加わった頃、継父武貞には彼よりも年長の子息がいた。後三年合戦において真衡の名で大いに活躍するこの人物も、当時はやはり祖父・父の「武」字を受け継ぎ「武真」と称していたのではなからうか。また、やがて武貞と清衡の母との間に男子が生まれ、彼は武貞の死後に義父貞衡の下で元服し家衡と名のることになる。この三兄弟こそが、後の後三年合戦で主役・準主役を演じることになるのである。

ここで清衡ら三兄弟の年齢差について、若干の考証をおこなってみたい。三人のうち生年が分かっているのはひとり清衡のみであり、あとの二人については推測に頼るしか術がない。

先学の見解の中には、真衡が清衡よりもはるかに年長であったとしているものがある。高橋富雄氏は真衡の生年を長元（一〇三一―三七）・長暦（一〇三七―四〇）年間頃と推測しているようであり、入間田宣夫氏も貞衡と真衡を同一人と見なしていることからみて、高橋氏と同様の想定に立っているように窺われる。²³しかしながら、真衡と清衡との年齢差が二十歳前後もあつたとするそうした想定には大きな疑問を感じざるをえない。何となれば、『話記』中には真衡は一切登場しておらず、彼の年齢が康平五年当時で二十歳代半ば以上にも達していたのならば、同年合戦をめぐる記述に名前すらみえないのはきわめて不審であるといわざるをえないからである。よほど特別な事情でもない限り清原氏の命運を賭けたこの重大な合戦に武則の嫡孫である若武者が出陣しないはずはなく、すると同書の康平五年合戦の記述に真衡の名がみえないのは、彼がまだ若すぎて出陣できなかったためと考える他ないと思われる。おそらく当時彼はまだ十歳代半ば、後半前後の少年であつたのではなからうか。またそのように推定するならば、清衡との年齢差はだいたい十歳前後くらいであつたのではないかとみられよう。

次に清衡と家衡との年齢差についてであるが、家衡の生年は最も早くみて康平五年合戦の翌年の同六年、前述した清衡の母と武貞との婚姻時期をめぐる管見を前提とすれば、最も可能性が高そうなのは同八〇治暦元年（一〇六五）かその翌年あたりということにならうか。²⁴とすれば、この二人の間も十歳差はないかもしれないかなりの年齢差が開いていたように推測される。

三兄弟の父武貞は、多分家衡が出生した後それほど経ない時期には世を去っていたように思われる。というのは、後述する延久二年（一〇七〇）合戦において清原氏軍の総帥を務めていたのは貞衡であり、もし武貞がその時にも生存していたならば当然奥六郡主清原氏の事実上の当主として彼がその役を果たしたに違いないと考えられるからである。

武貞の死を清原一族の大いなる危機とみていち早くそれへの対応に奔走したのは、まだ鎮守府將軍在任中の父武則であつたとみられる。老齢の彼は自らの余命が短いことを悟り、自分なき後に三人の孫の後見とするにふさわしい信頼に足る人物を捜し求めるべく、思案をめぐらすようになったとみられる。

そうしたおり、治暦三年（一〇六七）、源頼俊という人物が陸奥守に任じられ赴任してきた。頼俊は、頼義・義家父子と同じく清和源氏の軍事貴族とともに源満仲の子孫であるが、頼義・義家が満仲の三男頼信の嫡子・嫡孫であつたのに対して、頼俊は満仲の次男頼親の嫡孫であつた。同じ清和源氏の同族であるにも拘わらず、頼義の嫡子義家と頼俊とはライバル同士として激しく競い合っており、かなり仲も悪かつた。

同じく清和源氏の武将とはいえ、頼俊の奥羽住人たちに対する振舞いや態度は頼義・義家父子とはかなり違っていたようであり、国守頼俊と將軍武則との関係はすこぶる融和的であつた。そしておそらく

は国守頼俊の仲介によって、陸奥国南部の太平洋沿岸地域に勢力を張っていた海道平氏の貞衡という人物がおそらくその武勇と政治的手腕を買われて、武貞の三人の遺児の後見役をも務めるべく、武則の養子（入婿か？）となり彼らの義父として清原家に入ったものと推察される。

やや煩雑となるけれども、ここで旧稿での論を踏まえて貞衡の出自について考察を敷衍しておきたい。彼の名は延久二年合戦に関わる重要史料である「応徳三年（一〇八六）正月二十三日陸奥守源頼俊款状」（宮内庁書陵部蔵柳原本『御堂撰政別記』紙背文書、『青森県史』資料編古代1文獻史料23号）に「清原貞衡」と所見するが、その「貞」字については最近、柳原本原本や他の写本によれば「真」と読むことができ、この人物は真衡に他ならないと主張する説が提出されている。^{②③}ところが私が実際に諸写本調査をおこなったところ、そうした説は根拠が著しく薄弱であるといわざるをえず、問題の一字はやはりこれまで通り「貞」と読まれるべき蓋然性が高いものと判断された。^{②④}とはいえそれだからといって、かなり以前からしばしば指摘されていたように、同文書の「貞衡」が「真衡」の誤記であつた可能性までは勿論否定しきれないのであるが、しかしながら私は以下に述べる理由によつて「貞衡」＝「真衡」説は成立しがたいと考える。

まず第一には、年齢的にみて真衡と貞衡を同一人と考えるには大きな無理があることが挙げられる。前述のように真衡は清衡よりも十歳前後年長とみられ、すると延久二年合戦時にはまだせいぜい二十歳代前半～半ばぐらいの青年にすぎない。前九年合戦後に義家が二十五歳で従五位下出羽守に叙任されている例があるとはいえ、それでさえ武家棟梁嫡子の血統と長年の合戦における顕著な武勲とを兼ね合わせたごく例外的な特殊例に属すると考えられるのである。ましてや、若年の陸奥国住人に過ぎない真衡の延久三年（一〇七二）鎮守府將軍任官

はまずありえないことなのではなからうか。

第二には、『後三年記』が、武則が鎮守府將軍任官の榮譽に浴したことを讃辞をもって銘記しながら、真衡の將軍任官についてまったく記していないことに注目しないわけにはいかないであろう。もしも彼が將軍に任官した事実があつたならば、その冒頭部分で前九年合戦後における清原氏の大いなる繁栄を強調して述べている同書が、どうしてそれほど重要な事実を逸するようなことがあるというのか。「貞衡」＝「真衡」説では、その点についての合理的な説明がまったくつかないであろう。

そこで貞衡とは何者かとあらためて考えた時に注目されるのは、野口実氏によって紹介された「桓武平氏諸流系図」である。同系図は原本が鎌倉時代末頃までに成立したとみられる浩瀚な古系図集であるが、そこでは清原武則が菊多権守平安忠の子とされ、武則流の清原氏が桓武平氏の支流に位置づけられている。また武則の兄弟の位置に問題の「貞衡」の名がみえ、「從五下、鎮守府將軍、号三石城三郎大夫」との注が付されている。また同系図中には、武則の子息武貞の長子の位置に「実平」（＝真衡）の名が掲げられており、貞衡と真衡とは明らかに別人として扱われているのである。なお貞衡が石城三郎大夫と号したとある点に関しては、平安時代後末期より福島県浜通り地方に勢力を張っていた海道平氏の嫡流である磐（岩・石）城氏の諸系図中に「貞衡」の名がしばしば現れることも深い関係があるように考えられる。たとえば、『磐城系図』（『続群書類従』第六輯上、卷第三百三十九）、「仁科岩城系図」（『系図綜覧』第二）、「藩翰譜」所収「岩城系図」などはいずれも安忠―則道―貞衡の三代を記しており、同氏の系譜意識の上で貞衡の存在が一定の重要性をもっていたことが窺えるのである。但し、「桓武平氏諸流系図」が武則の出自を平氏としている点とはとても史実とは考えがたいが、しかしそのような誤解が後世に生じたのは、

武則流清原氏と海道平氏との間に緊密な同族的連合が形成された事実があったことの反映とも理解することもできよう。

一方で『康富記』文安元年（一四四四）閏六月二十三日条に掲げられた『後三年記』の要約文（中原康富が仁和寺御室の宝蔵に所蔵されていた『後三年絵』詞書の内容を要約したもの）には、「家衡打越伯父武衡館」云々とあり、後に述べるように後三年合戦最終段の金沢柵攻防戦において家衡とともに籠城した武衡が清衡・家衡兄弟のオジであったことが知られるが、この武衡についても貞衡と同様に磐城郡と関わり深い所伝が系図史料に頻出する。とくに注目すべきは『統群書類従』第七輯上、巻第百七十三に収める「清原系図」一本で、武衡を武貞の兄弟の位置に置き「住奥州磐城郡」・寛治五年十一月為源義家「被滅」との注を付しているが、実際に武衡・家衡が滅ぼされたのは寛治元年（一〇八七）のことであり、それを五年と記しているのは『後三年記』が元年を五年と誤記していたのをそのまま踏襲してしまったためと思われる。武則や家衡の名に付された注の所伝もすべて『話記』と『後三年記』の記述に依拠したとみて何らの矛盾もなく、だとすると右の武衡に関する「住奥州磐城郡」という注記も実は『後三年記』の現在失われている部分にそうした説明が存在していた、それにもとづいて記されたものであったと考えるのが自然な想定であろう。

また『百鍊抄』寛治元年十二月二十六日条には、「陸奥守義家言」上斬「賊徒平武衡之由」と所見しており、武衡が平姓とされている。さらに『吾妻鏡』養和元年（一一八一）九月三日条には、越後城氏の資永の母が「清原」武衡の娘であったとあるが、城氏も海道平氏と同じく平繁盛を祖とする桓武平氏繁盛流に属していた。武衡の娘が資永の父資国の許に嫁いだのも、あるいは海道平氏と城氏とが同族の誼で普段から互いに結びついていたことと深く関わっていたのではなかったか。

以上のように、貞衡という人物が海道平氏の中におり、清衡・家衡のオジである武衡が後三年合戦当時に磐城郡にいて平姓を称していたとすれば、清原氏と海道平氏との間で猶子交換がなされたのではないかとみるのが、それなりに自然であろう。おそらく武則は、三人の孫の後見役として海道平氏嫡流の貞衡を娘婿を迎えるかたちで自らの養子とし（貞衡の妻とされたのは武貞の嫡妻であった清衡の母もしくは武則の嫡女であったか）、一方武則の三男であった武衡は海道平氏の娘婿を迎えられて、同氏嫡流を嗣ぎ平姓を名のったものではなからうか。

そして、この義父貞衡の下で、武貞・武清兄弟は新たな父の名の一字を受け継ぎ、それぞれ真衡・清衡と改名したのであろう。「衡」字は当時、桓武平氏一族の間で少なからず用いられていたようで、彼らの改名は奥六郡主清原氏が桓武平氏系武士団と同族的連合の絆で結ばれたことを象徴するものでもあったのではないかと推察される。なおこの字が清衡を介して、後に代々の奥州藤原氏嫡系男子の名に受け継がれていったこともよく知られるところである。

なお三兄弟の義父貞衡は、延久二年（一〇七〇）に陸奥守源頼俊とともに、「閉伊七村」（岩手県中部太平洋沿岸地方）や「衣曾別島」（北海道南部）に軍事遠征をおこなった。この延久二年合戦の史実をめぐってはすでに別稿にて詳論したので、ここではごく概要のみを紹介するにとどめておきたい。

前九年合戦後、朝廷より奥羽への野心を警戒され冷遇の憂き目に遭っていた頼義・義家父子は、治暦四年（一〇六八）に後三条天皇が即位した後には天皇自身の信任を得てにわかに勢力を挽回させていき、事態はいつしか彼らが再び奥羽に軍事的侵略を仕掛けてこないとも分らない情況へと推移していった。そこで武則は、義家のライバルである陸奥守頼俊とともに策を弄し、手柄の先取りによって共通の敵である頼義・義家父子の動きを封じるべく、頼俊を総大将、貞衡を

副将として奥六郡・山北三郡や海道諸郡などより軍兵を集め、義家に先んじて「荒夷」を討つ軍事行動を起こしたのであった。

「閉伊七村」や「衣曾別島」方面への軍事行動は延久二年の夏頃に盛期を迎えていたとみられるが、まさにその頃、下野守の任にあった義家が謀略をめぐらし応酬の拳に出た。腹心の郎等であったとみられる陸奥国府在庁官人の藤原基通という人物を教唆して、陸奥国の印鑑を奪い取らせたのである。遠征先でそのことを知った頼俊は、貞衡に北辺での軍事行動の続行を委ね、自らは基通とその一味の掃討作戦に転じたが、ついに基通を捕縛することはできなかった。

同年八月になって、下野守義家より基通が自分の許に帰降してきた旨の報告が朝廷になされ、頼俊の面目は丸潰れとなる。その後も頼俊・義家兩人の間で緊迫の応酬が続くが、結局京への政治工作を征した義家が勝利を収めることとなる。頼俊は翌延久三年（一〇七二）六月、七月頃に「荒夷」らの首や捕虜をともなつて上洛したが、印鑑を奪われた失態を責められ、一切恩賞を得ることはできなかった。だが一方で後三条天皇は、同時に上洛したとみられる貞衡に対しては、北辺での軍事行動の戦果を高く評価し、鎮守府將軍に任じることでその功に報いたのであった。

その後頼俊は、起死回生を賭けて東国へ下向して基通一味の残党掃討に努め、義家の腹心の郎等平常家や藤原惟房らを捕縛し朝廷へ召し進めたが、最早巻き返しはならず、武門としての名誉を恢復できないまま虚しく陸奥を去ったのであった。

ところで、前鎮守府將軍武則はおそらく延久二年合戦の前後に世を去ったのではないかと思われるが、同三年に武則の嗣子貞衡が義父に続いて新たに鎮守府將軍に任じられ、武則流二代にわたる將軍累任が実現したことにより、武則流の權威はついに本家嫡流をも大きく上回るに至ったとみられる。その後、鎮守府將軍と奥六郡主を兼ねた貞衡

はおそらく承保年間（一〇七四―七七）頃まで清原一門の頂点に君臨し、その間に武則流への権力集中が積極的に推進され、一方でかつての嫡宗家であった光頼流は没落の一端を辿ることになったのではなかろうか。そして、その後おそらくは承暦年間（一〇七七―八二）以降、永保三年（一〇八三）以前の間に、清衡の兄である真衡が当主の座に就くことになったのであろう。あるいはその折に貞衡は、真衡による清原氏嫡宗の家督相続を見届けた後に、自ら身を引き出身氏族の海道平氏に復したのかもしれない。

四 後三年合戦

後三年合戦は、清原氏一族の内訌に端を発し、時の陸奥守であった源義家の介入によって事態の複雑化・激化を招いたところの奥羽における大規模な戦乱である。合戦の顛末を記した戦記物語である『後三年記』に比較的詳しい記述がみえるが、同書にはかなり作爲的な叙述もめだち、書かれていることのすべてをそのまま史実として信用するわけにはいかない。以下では、私なりの史料批判にもとづいて整理した事実関係に依拠して事件そのものについて概観するとともに、その中における清衡の動静を取り上げ考察してみたい。

さて、清原氏嫡宗として奥六郡主の地位を祖父武則・義父貞衡より継承した真衡は、海道平氏など東国各地の平氏勢力との同族的連合化をなお一層推進しようとする政策を打ち出した。それはかつて祖父武則が陸奥守頼俊の下で選択した政策を引き継いだものともみえるが、あるいはそれよりも海道平氏に出自をもつ義父貞衡の影響を強く受けたものであったのかもしれない。

男子がなかった真衡は、海道小太郎成衡というその名の通り海道平

氏出身の少年を養子に迎え、自分の後継者とした。そして成衡が成長し妻を娶る年齢になると、源頼義が常陸国住人多気権守平宗基の娘に産ませた女子をめあわせようとした。『後三年記』はそのことについて、陸奥国内には従者しかおらず同格の家柄の女性が探せなかったで、成衡の結婚相手を他国に求めたと説明しているが、理由はそれだけではなからう。おそらく真衡は、敢えて義家の腹違いの妹を成衡の妻に迎えることによって義家による奥羽侵略の策動を封じ込めようとするとともに、同じ繁盛流桓武平氏として海道平氏と近い関係にあった常陸平氏との同族的連合化を図ることをも意図して、この縁談を積極的に進めたのであらう。

ところが、真衡によって進められたこの極端な嫡宗継承路線が、瞬く間に同族内で物議を醸すことになる。本来奥六郡と出羽山北の在地勢力を代表する存在であった清原氏の次代当主とその妻の座にまったく清原の血を汲まないよそ者が据えられてしまえば、同氏は事実上他の氏族に乗っ取られたも同然である。真衡はあくまで奥六郡主清原氏の勢力の存続・維持を意図していたのではあったが、一門の中に彼のそうした政治路線に頑強に反対する抵抗勢力が形成されていたのも、もちろん無理からぬことであった。この嫡宗真衡に対する抵抗勢力のことを仮に守旧派と呼んでおく。

そしてこれら守旧派が、真衡に扈從する主流派に対抗するために担ぎ出したのが、当時清原氏嫡系の男子の中で真衡に次ぐ地位を保持していた清衡であった。清衡こそは、本来の奥六郡主であった安倍氏嫡流の血統を承け継ぐとともに、数多くの鎮守府將軍を輩出した名門秀郷流藤原氏の五位経清の嫡子であり、当主真衡への対抗馬に立てられるのは彼しかなかったとみられる。³⁷つまり後三年合戦勃発直前の奥羽北部では、嫡宗真衡を戴く主流派と、清衡を戴く守旧派とが厳しく相対峙しており、まさに一触即発の緊迫した情勢にあったと考えられ

るのである。

永保三年（一〇八三）の夏頃、真衡の嫡子成衡と源頼義の娘との婚礼が挙行された。一門の者や奥羽両国の従者たちは、次代の当主夫妻のために豪華な飲食を提供し、金銀・絹・布・馬の鞍などの祝儀の品々を献上した。その中に、出羽山北の山本郡に本拠をもつ吉彦秀武の姿があった。彼は前九年合戦最終段の康平五年（一〇六二）合戦において源氏・清原氏連合軍の三陣の陣押領使を務めた武勇の人物で、武則の母方の甥（秀武の母が武則の姉妹か）で婿でもあった。

『後三年記』の記すところによれば、老齡の秀武は跪いて朱塗りの盤に金をうずたかく積んだものを頭の上に捧げて臣従の意を表していたのに、当主真衡が五そうのきみという護持僧と圓基に興じていて顧みなかったことに腹を立て、金を庭に投げ散らし飯・酒を従者に与え、出羽へ逃げ帰ってしまったという。後でそのことを知った真衡は激怒し、ただちに諸郡の兵を集めて秀武を討ちに出羽へ出向することになった。

成衡の婚礼祝賀の儀の際に合戦の発端が生じたとする同書の記述は、おそらくそれなりに事実の一面を伝えていよう。しかしながら、戦端が開かれたことの真の原因が、まるで子供のけんかのような真衡と秀武との間の単なる感情的衝突に過ぎなかったとはいかにも考えにくい。というのは、秀武は後三年合戦の一連の戦闘において常に清衡と行動をとともにしていたようであり、彼こそは清原一門における守旧派の長老的存在ではなかったかと強く疑われるからである。そうであれば、彼はそもそも真衡の主導の下におこなわれた成衡の婚礼じたいを歓迎していなかった可能性が高い。おそらく出羽へ引き返した秀武の胸中には、真衡とその周辺の主流派勢力を打倒し、清衡とともに新たな政治体制を布きたいとの思いが込み上げていたのではなからうか。

秀武はただちに、奥六郡内に住む清衡・家衡と連携の体制をとる。清衡・家衡の軍勢は、秀武を討つべく出羽に進発した真衡の留守宅を攻めに向かい、途中で胆沢郡白鳥村の在家四百余を焼き払った。その報を聞いた真衡は、ひとまず秀武を討つことをあきらめ本拠に取って返した。

秋になると、源義家が陸奥守として赴任してきた。鎮守府政の現地責任者である奥六郡主の地位にあった真衡は、わざわざ陸奥国府に赴いて新たな国守の饗応に勤めなければならなかった。

饗応が済んだ後真衡は再び本拠に戻り、再度秀武を討つため出羽へ進発する。清衡・家衡の軍勢もまた前と同様に真衡の留守宅を攻めた。このとき留守宅を守っていた真衡の妻が、陸奥守義家の郎等であった兵藤大夫正経・伴次郎兼佐助兼の二人に援軍を請い、二人は手勢を率いて真衡の館に赴き、成衡とともに攻め寄せる清衡・家衡軍と戦った。なお現存する『後三年記』はこれより後、かなりの分量（全六巻中二巻分）の本文が欠落している。以下の叙述では暫く、『康富記』文安元年閏六月二十三日条に記された物語の要約文を素材として用いることになる。

正経・助兼は成衡とともに真衡の留守宅を守り戦ったが、寄せ手の清衡・家衡軍の勢いの前に苦戦した。そこで陸奥守義家が自ら精兵を率い、成衡を扶けに向かった。なおそれより前に義家は使を清衡・家衡に遣わして、「可_レ退_レ歟。尚可_レ戦_レ歟。」と問うた。清衡・家衡は退却して国守との合戦を避けようと考えたが、清衡の親族である重光という人物が、「雖_二一天之君_一不_レ可_レ恐。況_二於_二一国之刺史_一哉。既_レ対_レ楯交_レ刃之間、可_レ戦。」と強硬に主張したので、結局義家と合戦におよんでしまった。その結果、重光は義家に誅せられ、清衡・家衡は一馬に跨って敗走した。その後、清衡・家衡兄弟は義家の前に出頭し、自分たちに叛逆の野心はなく、死亡した重光が逆臣であったために合戦におよ

んでしまったと弁明して降伏を願い出た。義家はこれを受け容れて許したうえに、六郡（＝奥六郡）を二分し三郡ずつを清衡・家衡に与えた。

以上はほぼ『康富記』の記述の通りの物語のあらすじであるが、このときの「戦争責任」を一身に負われ葬り去られてしまった重光とは、いったいどのような人物であったのか。彼は「清衡の親族」であったとされるが、『話記』中に引用された康平五年十二月十七日陸奥国解には清衡の父経清の兄弟ではなかったかと推測される藤原重久という人名が「斬獲賊徒」の一人として挙がっており（該当部分は第二節においてすでに掲出）、重光とは後に出てくる重宗とともに前九年合戦で戦死したこの重久の子息ではなかったかと思われる。もしそうであるとすれば、前九年合戦と後三年合戦とを結ぶこれまで未知であった論理の糸が、ここにまた一筋見出されたことになる。清衡の父方の親族であったとみられる重光・重宗の両名は後三年合戦当時、清原一門において清衡側近グループの幹部格ともいえる重要な政治的地位を占めていた可能性が高いのであり、またそのことはとりもなおさず、前九年合戦の終結後に、清衡の実父経清の親族の生き残りの人々が清原氏の許へ身を寄せていたというこれまでの通説的見解からすればたいへん意外な事実が存したことをも示しているのである。

さて、『康富記』によれば、清衡・家衡が義家に敗れて逃走した場面が続いて、「此間真衡於_二出羽発向之路中_一、侵_レ病頓_レ死_レ了。」と突如として真衡病死のことが記され、そのすぐ後に清衡・家衡が義家に降伏した旨の記述が続く。それらの事件相互の前後関係は非常に不明瞭であるが、清衡・家衡の降伏が真衡の死没による事態の急変を前提としたものであった可能性は、かなり高いように窺われる。

そして真衡なきあとに、義家は不自然に態度を変じ、清衡らをただちに許したばかりか、あまつさえ真衡が生前奥六郡主として治めてい

た奥六郡を三郡ずつに分割して二人に与えてしまったというのである。真衡が死亡したといっても、彼には嫡子成衡がいるのであるから、本来であれば奥六郡は成衡が相続すべきであるが、そうはなっていない。明らかに義家が清原氏の内部に介入し、成衡を廃嫡して奥六郡を清衡・家衡に均等相続させたとみる他ない。

いったい義家の意図とはいかなるものであったのか。まず彼は戦いの当初は真衡に味方したが、実はそれは決して彼の本意ではなかったであろう。『康富記』に「六郡割分、各三郡充被_レ補_二清衡・家衡_一」^⑩、家衡雖_レ譏_二申兄清衡_一、大守不_レ許也。剩清衡有_二抽賞_一之間、家衡令_二同居清衡館_一之時、密謀_二青侍_一、欲_レ害_二清衡_一」^⑪とあるように、義家は奥六郡を二人に分割相続させた後しきりに清衡ばかりを引き立てていたようで、わざと兄弟仲が悪くなるように仕向けていた疑いが濃厚である。とすれば、彼はおそらく最初から、守旧派の頂点に立っていた清衡に目をつけていたのではないかと推考される。義家は、傀儡として利用すべき清衡一人を除いて清原氏嫡流の男子を次々と始末し、最後には自らが奥羽両国に覇権を樹立すべく、あらかじめ綿密・周到な計画を立てていたのではなかったか。

また成衡と義家異母妹との婚姻も、そもそも義家による奥羽侵略の策動を抑えようとする真衡の意図より出たものであったから、義家としては何としてもこの障碍を取り除く必要があった。真衡を亡きものにし成衡を廃嫡したい動機が、実際に義家の胸中に存した可能性はかなり高いのではなからうか。真衡の「頓死」が実は義家による謀殺であったとみると、前後の話の筋が最もよく通るのである。

ところで、義家によって真衡の嫡子の座から追われた成衡は、その後どうなったのか。「大中臣氏略系図」と題する鎌倉時代末期に成立したとみられる古系図には、「海道小太郎業平^{ナリヒラ}（東平^{トウヘイ}）蒙_二御勘気_一」^⑫之時、賜打手^{ツキテ}、於下野国氏江風見楯^{シノエノカサ}令_二討_一之^⑬、ス、キ丸ト申ス金作太

刀取進上之^{ツキテ}。業平夜黒^{ヨシノ}ヌリノサヤニサシ、昼ハ金作ノサヤニサシケリ。或説云件太刀ヲハ人数流^{ヒトタナカシ}樋申之^{ヒギモ}。云々。此時頼経賜三星文^{ミヤノミ}畢^ハ。」との注目すべき記述があり、海道小太郎業平（＝成衡）の殺害を系図中に名が所見する中郡頼経という武将が主君の源義家より命じられ、下野国塩谷郡の氏江・風見の楯でこれを討ったという意味と解される^⑭。成衡は清原氏より離された後、義家によって下野国に遷され、その後義家の郎等の手によって殺害されるという悲劇の運命を辿ったようである。

『康富記』の記す事件の概要に話を戻す。家衡が国守義家に対して兄清衡のことを讒言したところ、義家は家衡を咎めただけでなく、かえって清衡のことを頻りに引き立てた。そこで家衡は、清衡の館に同居していた時、密かに青侍の某に依頼して清衡の殺害を謀った。清衡は先にそのことを知って叢中に身を隠したが、家衡は清衡の館に火を放ち、その妻子眷属を殺害した（清衡の妻は清原氏の女性であったとみられる）。清衡は義家の許に参じ、家族の不幸を歎き訴えたところ、義家は自ら数千騎を率いて家衡が楯籠もる沼柵を攻めに向かった。

おそらく『後三年記』欠失部分の本文でも『康富記』と同様に、家衡が兄清衡への嫉妬から生じた憎悪によって清衡殺害を企てたように記されていたものと思われる。しかし『後三年記』の祖本は現在では他ならぬ清衡その人の影響下に成立した可能性が高いとみられており^⑮、そうしたストーリーが果たして真実であったかどうかは慎重に判断する必要がある。とくに『康富記』の文章によれば、家衡による清衡襲撃はあたかも義家の思慮の足らない軽率な振る舞いによって惹き起こされたかのようなものであり、また家衡を出羽に攻めたのはあくまで義家の意志によるものであって、清衡本人はただ彼の前で家族の死の悲しみを歎いたにすぎなかったかのように受け取れてしまう点にも、清衡にできるだけ戦乱の責任を負わせたくない『後三年記』作者の心情

が見え隠れしているように窺われる。そういえば、同書の後段、後三年合戦最後の戦いである寛治元年（一〇八七）の金沢柵攻防戦についての長大な叙述の中に清衡はたった一ヶ所だけしか登場しておらず、明らかに物語作者は清衡が義家とともに実弟家衡を討った史実をできるだけ隠蔽しようとしているのである。

それでは、家衡挙兵の真の理由とはいったい何であったか。家衡の挙兵は応徳三年（一〇八六）の夏から秋頃のことであったとみられるが、同じ年の正月には前陸奥守源頼俊が、延久二年合戦の際に恩賞を得られなかったことへの埋め合わせとして讃岐守に任じて欲しい旨を朝廷に願い出ている事実があり（「応徳三年正月二十三日前陸奥守源頼俊款状」前出）、この際大いに注目される。頼俊は朝廷に提出した款状の中で、延久二年合戦の折に自分にどれだけ多大な戦功があったかを力説しているが、十五、六年も前の戦役での功績を今更持ち出してくるのはいかにも不審である。だがこのとき頼俊の側には清原一門の有力なグループがついており、延久二年合戦における頼俊の戦功について積極的に口添えをしていたとしたら、頼俊がこの時期にこうした文書を朝廷に提出したことも一応納得がいく。おそらく当時清原一門の中に、頼俊の受領領官運動を支援するグループが存在したのである。

義家の宿敵である頼俊に近づいたのは、清原一門の主流派（旧真衡派）であったと推察される。彼らは、陸奥守義家が自分たちを裏切つて清衡と関係を深めたことをみて取り、武則の代以来の交誼があった頼俊に再び接近してそれに対抗しようとしたのである。

そしてさらに主流派勢力は、清衡と不仲になっていた弟家衡にも目をつけ、義家や清衡との離間を画策したのである。すなわち家衡は、主流派に抱き込まれ後押しをうけるかたちで挙兵したものと考えられるのである。そして家衡自身もまた、義家と清衡との個人的癒着ともみえる密接な関係が、清原氏を破滅に導きかねない深刻な危険をはら

むものと認識するに至ったが故に、あえて両者を敵にまわして挙兵に踏みきったのではなからうか。家衡が清衡を襲撃した動機にしても、単なる兄弟間の確執や憎悪ばかりであったとはいえないのである。

沼柵に楯籠もった家衡軍は、応徳三年九月頃より陸奥守義家率いる軍勢と合戦におよんだ。義家は数千騎を以てこれを攻めたが長期戦となり、厳寒と大雪に見舞われて苦戦を強いられ、数ヶ月の後ついに家衡を攻めきれずに一旦国府へ引き上げた。なおその間、義家が奥羽で合戦をはじめたとの情報は都へも伝わったが、宮廷貴族らは義家の行為をあまり好意的にみてはいなかったようで、時の関白藤原師実の嫡子師通も思わず不審の言葉を洩らしている。⁴³⁾

ところで、清衡・家衡が真衡の留守宅を襲撃した場面以降の本文が欠落している現存『後三年記』であるが、沼柵攻防戦が終わったところから物語の最後まではすべて本文が遺っている。以下では再び同書を素材に用いつつ、その後の事態の展開をみていく。

『後三年記』は、清衡・家衡のオジ（『康富記』は「伯父」と記すが、あるいは筆者中原康富の記憶違いで「叔父」が正しいか）である武衡が、沼柵攻防戦で義家を追い返すことに成功した家衡の武勇を讃え自ら与力を買って出るかたちで、陸奥国から自軍を率いて家衡軍に合流したように記している。だがそうした説明も、実はこの事件の裏にあった政治的内情が後世に伝わることを嫌った清衡の意図の下に述べられた虚構である疑いが濃厚である。

すでに前述したように、武衡は清原氏出身でありながら海道平氏の娘婿に迎えられてその嫡流を嗣いだ人物と推察される。彼は平姓を名のつてはいたが、当時清原一門の中では家衡よりも地位の高かった人物であった。実際に『後三年記』では武衡は、最後の合戦である金沢柵攻防戦の場面において明らかに武衡・家衡軍の総帥として描かれているし、『本朝世紀』『百鍊抄』の合戦終結を伝える記事にも陸奥守義

家が「賊徒（平）武衡」を斬ったと記され、また『今昔物語集』中の後三年合戦の顛末を題材とする説話（本文は欠話とされている）の題名も「源義家朝臣、罰清原武衡等語」とされているなど、いずれにおいても義家の敵方の首領が家衡ではなく武衡と認識されていることが分かるのである。

鎮守府將軍武則・同貞衡の權威の恩恵に浴し、太平洋海上交通の重要拠点でもあった海道平氏の本拠磐城郡を領する陸奥国府の有力在庁官人であった武衡こそは、まさに当時清原一門主流派の頭目の地位にあった人物であったと思われる。前年に源頼俊と手を結んで守旧派に対する巻き返しを図り、同時に家衡を後押しして挙兵を促したのも、実はこの武衡による仕業であったのではなからうか。

つまるところ、金沢柵攻防戦への武衡の参戦は、それまで黒幕として陰で暗躍していた主流派の頭目が、ついに公然とその姿を顕したことに他ならなかったであろう。

またその頃朝廷では、「奥州合戦」を止めさせるため官使を現地へ派遣すべきことや、義家への沙汰のことなどが議されており、事態は圧倒的に義家に不利なかたちで進行していたようである。

寛治元年九月、出羽国平鹿郡金沢柵に楯籠もる武衡・家衡軍と陸奥守義家・清原一門守旧派連合軍との激烈な死闘が開始された。『後三年記』は、「金沢の柵といふ所あり。それはこれ（沼柵―樋口注）にはまさりたる所なり。」と、同柵での籠城戦を提案したのは武衡であったとする。

義家が奥羽でまさに合戦におよばんとしていることを聞きつけた義家の弟義光は、左兵衛尉の官を捨てて出羽に下り、兄の許へ駆けつけた。なお『為房卿記』寛治元年八月二十九日条によれば、義光は身の暇も請わず朝廷に無許可で陸奥へ下向したため同官を解任されていたことが知られる。

『後三年記』によれば、武衡・家衡を討つため出陣した義家方の軍勢（清原一門守旧派の軍勢を含む）は「数万騎」の巨軍であったとされるが、やや過大に過ぎる感もあつてただちには信を置きがたい。とはいえ、奥羽両国における武衡の政治的実力や權威がはなはだ大きかったために、陸奥守義家と陸奥国府有力在庁官人武衡との直接対決という図式が成立したことで、奥羽両国内の武者たちが大きく二分されるような形勢へと導かれたものかもしれない。

ともかくも相当な大軍勢によつて金沢柵攻略に臨んだ義家であったが、籠城する武衡・家衡軍もきわめて強く、敵方に攻撃の逞を与えなかった。金沢柵の守りは非常に堅固で、城内よりさながら雨霰のように発せられる矢や石の前に義家方の軍は多数の死傷者を出し、なかなか敵に攻め込むことができなかった。『後三年記』によれば、吉彦秀武が城を完全包囲しいわゆる兵糧攻めの戦法を採るべきことを義家に提言したとされ、ここに義家は意を決し金沢柵包囲作戦を敢行するのである。なおこのとき清衡が、義家・義光や同族重宗（前述したように清衡の父方のイトコか）とともに金沢柵周辺を包囲する軍勢を指揮していたことも、『後三年記』中に所見がある（金沢柵攻防戦に関わる叙述の中で清衡の名がみえるのはその一ヶ所のみ）。

戦いの最中のある日、家衡の乳母の子で武衡の従者である千任（『康富記』では「平千任」。海道平氏傍流の人物か）が金沢柵の柵の上に立ち、義家に向かって、「汝か父頼義、貞任・宗任をうちえすして、名簿をさ、けて故清將軍（武則―樋口注）をかたらひたてまつれり。偏にその力にてたま〜貞任等をうちえたり。恩をになひ徳をいた、きて、いつれの世にかむくひたてまつるへき。しかるを汝、すてに相伝の家人として、かたしけなく重恩の君をせめたてまつる。不義不忠のつみ、さためて天道のせめをかふらむか。」と言ひ放った。義家がこれを深く憎んだであろうことはいうまでもない。

その後義家方による兵糧攻めが次第に効果を現してくる。金沢柵内の食糧が尽きていく中で、武衡は義家の弟義光に宛てて文を送り、降伏を願ひ出てきた。

義光は、武衡が降伏を請うてきたことを総大将である兄義家に告げたが、義家は決してそれを許そうとはしなかった。そこで武衡は再び義光に文を送り、一旦義光を金沢柵内に招き、その後彼に付き従うかたちで降伏したいと申し出てきた。義光は武衡の要請に応じ自ら金沢柵に出向こうと思ったところ、義家は義光を厳しく叱責しそれを断固許さなかったという。

ここで義家・義光兄弟の間には明らかな意見の相違がみられる。兄義家は敵方の将をすべて斬ろうとするほどの激しい執念に身を焦がしていたのに対して、弟義光はむしろ自分たち一族が政界で孤立し没落する危機を回避するためには、武衡の降伏を受け容れるかたちで戦いを終結させる方が得策であると考えていたのであろう。だが義光も、さすがに総大将である義家の意に従わないわけにはいかなかった。

武衡はさらに重ねて義光に文を送る。「御身渡給事あるへからずは、しかるへき御使一人を給て、思ことよく／＼申ひらかむ」と。結局、剛勇で名の聞こえた腰滝口季方という人物が、義光の名代として金沢柵に赴くことになった。

なお『後三年記』はこの季方のことを「義光が郎等」と明記しているが、『神明鏡』や『源威集』によれば、前九年合戦における天喜五年（一〇五七）黄海合戦で、主君である源頼義・義家父子とともに窮地より生還したとされる五騎の中にその名がみえる。季方は義光の郎等ではあったが、その経歴から察するに義家ときわめて意を通じやすい人物で、彼が義光の名代に選ばれたのには実は義家の意向が色濃く反映していた可能性がある。また季方は『尊卑分脈』中にも「季賢」としてみえており、その父は何と前九年合戦終結後に貞任・重任や経清の

首を都へ運んだ献首使の藤原季俊であった。季俊―季方父子は経清―清衡父子と同じく秀郷流藤原氏であり、季俊は経清の父系のイトコ頼俊の子とされており、両者はさほど系の遠くない同族であったのである。

一人金沢柵内に乗り込んだ季方は、武衡と直接対面する。そのとき家衡は、隠れて姿を現さなかったという。重ねて降伏を懇願する武衡に対して季方は冷淡にもまったく取り合わず、一切降伏には応じない旨を強く示して陣中に帰った。武衡らの降伏の道を絶ち、無理やり落城に追い込むことを意図したとみえるこのときの季方の言動は、明らかに主君義光ではなくその兄義家と意を通じたものであったと考えられる。

降伏を受け容れられなかった武衡・家衡らは、そのまま破滅に向かった。籠城を続ける。武衡は女・子供など非戦闘員の命を救うために城門を開けて下らせ、それらの身柄を義家方に委ねようとしたが、義家は吉彦秀武の「このくたる所の雑女・童部は、城中の兵どもの愛妻・愛子ともなり。城中にをらは、夫ひとりくひて、妻子に物くわせぬ事あるまし。おなしく一時にこそ、うえしなむすれ。しからは、城中のかて、いますこしとくつくへきなり。」との提言を容れて、たちどころに皆殺しにした。

寛治元年十一月十四日の晩から翌朝にかけての戦闘で、ついに金沢柵は落ちた。城内では義家方の軍勢による目を覆わんばかりのおびただしい殺戮と掠奪が繰り返りひろげられ、凄惨をきわめた。

武衡は城中の池に身を隠したが発見されて引き出され、千任もまた生け捕られた。武衡は義光を頼って命乞いをし、また義光も義家に向かつて、「兵のみち、降人をなたむるは古今例也。しかるを武衡一人、あなかに頸をさるる、事、其意如何。」と主張して、武衡の処刑に反対した。ところが義家は、「降人といふは、た、かひの庭を遁て、人の

手にかゝらずして、後にとかをくひて頸をのへてまいるなり。いはゆる宗任等なり。武衡は、たゝかひの庭にいけとらへにせられて、みたりかはしく片時のいのちをおしむ。これをは降人といふへしや。君、この礼法をしらす。はなはたつたなし。」と反論し、義光の意見を退けた。結局武衡はあつてなく斬首されてしまう。

千任は前に義家を侮辱したことを責められて、金鉗で歯を突き破られ舌を引き出されて切られた。さらに義家は千任の身体を縛りかがめて木の枝に吊し、足の下に武衡の首を置いた。千任が力尽きて主君の首を踏むと、義家はそれをみて「二年の愁眉、今日すてにひらけぬ。」と言った。

家衡は落城の際に、六郡第一の馬といわれる愛馬花柑子を自ら射殺し庶民の姿に変装して城外に逃げのびたが、金沢柵より遠く離れた道を固めていた陸奥国に名をえた兵である県小次郎次任によって発見され撃ち殺された。次任は家衡の首を切つて、義家の前に持参した。義家はそれをみて大いに喜び、紅の絹や鞍を着た上馬一疋を褒美として次任に与えた。また武衡・家衡の主たる郎等ども四十八人の首が、義家の前に懸けられた。

清衡はおそらく、金沢柵包圍網の一角に位置する自軍の陣中において、武衡・家衡らの最期のありさまを伝え聞いたものと推測される。同族内での分裂・抗争劇の招いた結末とはいえ、源氏の側に与して武衡・家衡を攻めていた彼は、彼らの無慚な最期をいっただいどのよう受け止めたのであろうか。時に清衡三十二歳であった。（未完）

注

（1） 清衡の生涯について論じた先学の著作のうち主要なものを掲げておく。高橋富雄『奥州藤原氏四代』（吉川弘文館、一九五八年）、板橋源『中尊寺と藤原三代』（東北出版、一九五九年）、同『奥州平泉』（至文堂、一九六六年）、

同『北方の王者—平泉藤原氏—』（秀英出版、一九七〇年）、高橋富雄『藤原清衡』（清水書院、一九七一年）、新野直吉『古代東北の覇者—史実の中の安倍・清原・奥州藤原氏—』（中央公論社、一九七四年）、高橋富雄『平泉—奥州藤原四代—』（教育社、一九七八年）、同『奥州藤原氏—その光と影—』（吉川弘文館、一九九三年）、大矢邦宣『奥州藤原氏五代』（河出書房新社、二〇〇一年）、高橋源『奥州藤原氏—平泉の栄華百年—』（中央公論社、二〇〇二年）、板橋源『平泉三代』（『岩手県史』第一巻、上代篇・上代篇、岩手県、一九六一年）、同『安倍氏・平泉藤原氏時代の平泉』（『平泉町史』第三巻、総説・論説編、平泉町、一九八八年）。

（2） 大石直正「中世の黎明」（小林清治・大石直正編『中世奥羽の世界』東京大学出版会、一九七八年）。

（3） 佐藤圭「永承二（一〇四七）年における五位以上の藤原氏の構成」（『年報中世史研究』八、一九八三年）。

（4） 高橋富雄『奥州藤原氏四代』前掲注（1）など。

（5） 頼清は『造興福寺記』永承三年（一〇四八）三月二日条に前陸奥守として所見し、彼の前任者である藤原頼宣（長元九—一〇三六年十月任）と後任者である藤原登任（永承六—一〇五一年任終）がそれぞれ最長の一期五年を満了したと仮定すれば、彼の在任期間は長久二年（一〇四一）より永承元年（一〇四六）の間に置かれるべきであろう。

（6） 小松茂美編『続日本の絵巻17 前九年合戦絵詞 平治物語絵巻 結城合戦絵詞』（中央公論社、一九九二年）二四頁。

（7） 高橋富雄『藤原清衡』前掲注（1）、一九八四年復刊清水新書本、八六—八七頁。

（8） 樋口知志「延久二年合戦について」（天野哲也・小野裕子編『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館、二〇〇七年）、注（34）、同「前九年合戦の一断面—清原氏の参戦理由をめぐって—」（『杜都古代史論叢』今泉隆雄先生還暦記念会、二〇〇八年）。

（9） 頼時の五男正任は『話記』の記すところによれば、康平五年合戦の際に戦場から逃走し、出羽山北清原氏の当主光頼の子息大島山太郎頼遠の居宅に身を潜めていたといひ、彼は清原氏と女系親族の關係にあつたと推察される。正任の妻が頼遠の姉妹であつたか。その正任はその後さらに「狄地」へ逃れ、そこで宗任がすでに帰降したことを知って出頭してきたとされているが、その点は宗任と正任とが同母兄弟としての固い絆で結ばれていたことを示唆していると思われる。また同年合戦における源氏・清原氏連合軍の宗任

に対する攻め方が貞任に対するのと比べて著しく手ぬるいことも、彼が清原氏の女系親族であったことが大きく関係しているものと考えられよう。樋口知志「前九年合戦の一断面」前掲注(8)。

(10) 『話記』によれば、経清は天喜五年(一〇五七)黄海合戦の後、衣川関を出て諸郡の官物を私に徴収したといい、また宗任は康平五年合戦の中盤、磐井以南の諸郡の民に命じて源氏・清原氏連合軍方の物資輸送や人の往来を妨害させていたという。

(11) 『本朝統文粹』巻六、奏状、申受領所収、治暦元年(一〇六五)?源頼義款状に、「天喜元年、兼鎮守府將軍。」と所見する。なお『話記』は「拜為陸奥守」、兼「鎮守府將軍」、令「討頼良。」と、頼義が鎮守府將軍に任じられた年についてきわめて曖昧な記し方をしている。

(12) 樋口知志「奥六郡主」安倍氏について(「歴史」九六、二〇〇一年)。

(13) 『範国記』同日条。

(14) 樋口知志「前九年・後三年合戦と清原氏」(『秋田市史』第一巻、先史・古代通史編)秋田市、二〇〇四年。

(15) 奥六郡主安倍氏、出羽山北主清原氏が、奥羽の奥郡ブロックである奥六郡、出羽山北三郡における現地執行機関の要として国家政府により登用された存在であったことは、樋口知志「奥六郡主」安倍氏について(前掲注(12))において詳論した。

(16) 『百鍊抄』天喜五年九月二十三日条に「俘囚安倍頼時去七月廿六日合戦之間中矢」とあることより、頼時は七月二十六日の戦場で負傷したものとと思われる、その後彼は鳥海柵に帰還してから没している、だいたい七月末から八月初旬頃に死亡したのではなからうか。

(17) 頼義が陸奥守に再任された時期については、『話記』は天喜四年の頼義の任終にともない後任の陸奥守が決まったが、合戦の噂を聞き辞退して赴任しなかった、朝廷は急遽頼義を陸奥守に再任し、安倍氏追討を遂げさせようとしたとしている。『百鍊抄』はそれに引き摺られたためか、彼の陸奥守再任を天喜四年十二月二十九日のこととしている(同日条)。しかしながら、頼義の後任であった藤原良経は、『扶桑略記』によれば陸奥守に任じられた翌年の天喜五年十二月二十五日には兵部大輔に栄転しているから(同日条。なお養老官位令によれば大國守の相当位は従五位上であるのに対して兵部大輔は正五位下)、僅か一年間ほどの陸奥守在任中にもそれなりの功労があったとみなければならぬ。以上より頼義は、『扶桑略記』が示すように離任後一年間ほどの空白を挟んで、天喜五年末に陸奥守に再任されたもの

と考えられる。

(18) 頼義包圍網の中心にあったのは、頼義が鎮守府將軍を復活させ自ら兼任した折に出羽城介の座より追われた感みをもつ平重成の長子城太郎貞成であったのかもしれない。遠藤巖「秋田城介の復活」(高橋富雄編『東北古代史の研究』吉川弘文館、一九八六年)によれば、出羽城介廃絶後も重成の血統は秋田城在庁勢力を束ねる現地有力者の地位を占めていたとされており、貞成の許に結集した秋田城在庁勢力が頼義包圍網の主力の一翼を担っていた可能性は少なからざるように思われる。

(19) 樋口知志「前九年合戦の一断面」前掲注(8)。

(20) 『扶桑略記』康平六年二月二十七日条。なお『話記』は論功行賞人事の日付を二月二十五日とし、また武則の新官位を鎮守府將軍從五位下とするが、『扶桑略記』は二十七日のこととし、新官位を鎮守府將軍從五位上としている。いずれも『扶桑略記』の方に従うべきであろう。

(21) 『朝野群載』卷十一廷尉所収、康平七年三月二十九日太政官符、『百鍊抄』同日条、『扶桑略記』同年三月条。

(22) 高橋富雄「藤原清衡」前掲注(1)は真衡の年齢について、後三年合戦勃発の頃に四十五―五十歳くらいであったと推測しており、するとその生年は長元七年(一〇三四)から長暦三年(一〇三九)の間に置かれることになるが、やはりいかにも早すぎる感を否めない。

(23) 入間田宣夫「延久二年北奥合戦と諸郡の建置」(同氏著『北日本中世社会史論』吉川弘文館、二〇〇五年、初出は一九九七年)。

(24) すなわち家衡は、後三年合戦勃発時にはまだ数え年で十代の若年に過ぎなかった可能性が高く、最大限年長にみても二十一歳を上回ることはいえないことになる。

(25) 樋口知志「前九年合戦と後三年合戦」(入間田宣夫・本澤慎輔編『平泉の世界』高志書院、二〇〇二年)、同「前九年・後三年合戦と清原氏」前掲注(14)。

(26) 小口雅史「延久蝦夷合戦をめぐる覚書」(中野栄夫編『日本中世の政治と社会』吉川弘文館、二〇〇三年)、同「延久蝦夷合戦再論」(徳本系「御堂御記抄」諸本の検討を中心に)『義江彰夫編『古代中世の史料と文学』吉川弘文館、二〇〇五年)。

(27) 樋口知志「延久二年合戦について」前掲注(8)。

(28) 高橋富雄「藤原清衡」前掲注(1)。

(29) 野口実「十一―十二世紀、奥羽の政治権力をめぐる諸問題」(同氏著『中

世東国武士団の研究」高階書店、一九九四年、初出は一九九〇年。なお「桓武平氏諸流系図」の全文は、『中条町史』資料編第一巻考古・古代・中世（中条町、一九八二年）に翻刻されている。

(30) 但し新訂増補国史大系本『百鍊抄』では「平」を誤りとみ、神宮文庫蔵旧宮崎文庫本の傍注に従って「清原」に改めている。

(31) 高橋一樹「城氏の権力構造と越後・南奥羽」（柳原敏昭・飯村均編『御館の時代—十二世紀の越後・会津・奥羽—』高志書院、二〇〇七年）は、『話記』に出羽秋田城介として登場する平重成の子である城太郎貞成が秋田城有力在庁として清原氏と提携関係を結び、さらには清原氏と海道平氏とを結びつける役割をも果たしたと推測している。傾聴に値する興味深い意見であるが、貞成に始まる城氏が主に越後を中心に展開し出羽国内に足跡をあまり残していないのは、前九年合戦後における武則流清原氏の台頭によって出羽国内での活動を阻まれたためではないかと推測され、城氏と清原氏の間に長期にわたる提携関係があったとは解しがたいこと、海道小太郎成衡の出自はやはり海道平氏であるとみるべきで、その父が氏のいうように城貞成であったとは考えがたいように思われることなどの疑問が残り、にわかには賛同できない。私見ではすでに本文中に述べたように、清原氏と海道平氏とを結びつける役割を果たしたのは陸奥守時代の源頼俊であったと考えておきたい。

(32) 「桓武平氏諸流系図」の現状では武則と貞衡とが兄弟であることを示すようなかたちの系線が引かれているが、その点は原系図作成の際か、原系図より筆写した際に線を引き誤ったものではなからうか。

(33) なお『話記』中には、康平五年合戦における源氏・清原氏連合軍の七陣の陣押領使として清原武道の名がみえる。彼の字は「貝沢三郎」であり、武衡が『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）十月二十一日条をはじめとする諸史料で「將軍三郎」と称されているのと奇妙に類似する。政治的地位・年齢の両面からみて、武衡ほどの人物が康平五年合戦に参加しなかったとはきわめて考えにくく、あるいは武道とは武衡の改名前の名ではなかったらうか。

(34) 『尊卑分脈』によって桓武平氏（高望流）で「衡」字を有するほぼ同時代の人物を探せば、①国香子息貞盛の子の維衡、②維衡の孫・正度の子の季衡、③同じく貞衡（その四代下より良平・桓平など嫡系男子に「平」字がみられる）、④同じく正衡（清盛の曾祖父）、⑤貞盛弟繁盛の孫、兼忠の子の高衡、⑥高衡の子の兼衡が見出せる。またそれ以外では、『話記』に系不詳の伊具十郎平永衡がみえ、さらに海道平氏一族の人と推察される貞衡と成衡がいる。以上のように桓武平氏にはほぼ同時代に「衡」字をもつ男子が少なから

ず見出されることに加えて、この字が「平」と意を通じ「たいらか」の訓をもつこともまた、本文に記した推察を助けるものではなからうか。

(35) 樋口知志「延久二年合戦について」前掲注（8）。

(36) ここで、本来の清原氏嫡宗家であった光頼流の前九年合戦後における動静について補足的管見を述べておきたい。康平五年合戦の際に光頼の子息頼遠が安倍頼時の五男正任を匿っていたことから窺えるように、嫡宗家光頼流は戦後に宗任を擁立して安倍氏を継承、存続させることを強く意図していたとみられるが、それが水泡に帰し、光頼の弟武則が奥六郡主の座を手にし奥六郡へ移住した段階以降、光頼流は次第に政治的実権を後退させていき、延久三年以降には庶流であった武則流に清原氏嫡宗家の座を奪われることとなったのではあるまいか。またその間、源頼俊が陸奥守として武則流を引き立てとりわけ重く用いたり、海道平氏より入って武則の跡を嗣いだ貞衡が出身氏族である海道平氏の支援の下に武則流への権力集中を図るなどのことがあったのではないかと推察される。そして『後三年記』冒頭部分が述べるように、武則の嫡孫貞衡が当主の座に就いた頃には、最早彼の権力は同氏他流の追隨を一切許さないほどに鞏固なものとなっていたとみられる。なおその段階ではおそらく出羽山北三郡もすでに武則流の支配下に入っていたものと思われるが、奥六郡がほぼ完全に武則流当主による単独支配の下に組み込まれていたのに比較すれば、山北三郡では多分にかつての同族連合的支配の様相が残されており、清原氏嫡宗の貞衡は同族に対して所領支配の承認・安堵をおこなうことを通じて、在地社会における政治的秩序の頂点に立ち最高領有権の保持者として君臨していたのであろう。後三年合戦において家衡や武衡とともに陸奥国内に本拠をもっていたにも拘わらず、山北地方の城柵を占拠し戦うことが可能であった事実の背景には、そうした山北三郡のもつ固有の性格が伏在していたとみられるのである。

(37) 清衡の母の母系の血統は前に本文中でも触れたように（第一節）、かつて清原氏嫡宗家であった光頼流であったと推測される。注（36）で指摘したように同流は後三年合戦勃発前夜のこの時期にはすでに没落していたものとみられるけれども、あるいは本来の嫡宗家であったという権威性をまだ保持している、その点も清衡が守旧派の人々に支持されたことの因であったのかも知れない。さらにいえば、旧嫡宗家である光頼流と深い関わりをもつ勢力が少なからず守旧派の中に組織されていた可能性も多分にあるのではなからうか。

(38) 本文中で後述するが、秀武は清衡が陸奥守義家の側に抱き込まれた後に

も変わらず彼と行動をともしており、寛治元年（一〇八七）金沢柵攻防戦においては二度にわたり総大将義家に作戦を提言している。

(39) 康平五年十二月十七日陸奥国解には、「斬獲賊徒」として藤原重久、「帰降者」として藤原頼久・同遠久の名がみえ、「久」字を共有するこの三人は兄弟かとみられる。また経清の父の名は『尊卑分脈』によれば頼遠であり、頼久・遠久はそれぞれ父の名の一字ずつを受け継いだものかと思われる。以上よりこれら三兄弟は経清の兄弟ではなかったかと推考される。なおこの仮説は、一見経清のみが父とも兄弟とも一字も共有しない点が弱点のようであるが、本文第一節で考察したように経清の「清」字は彼の主君であった源頼清より拝領したのではないかと推測され、本来の彼の名はあるいは頼経または経頼ではなかったかとも臆測される。

(40) 網野善彦「桐村家所蔵『大中臣氏略系図』について」〔茨城県史研究〕四八、一九八二年。

(41) 『康富記』文安元年閏六月二十三日条の本文では「青侍、」と表記されており、中原康富がみた絵巻物の詞書にはその青侍の名が記されていたものと思われる。

(42) 野中哲照『奥州後三年記』の成立年代〔鹿兒島短期大学研究紀要〕五六、一九九五年。また樋口知志「前九年合戦と後三年合戦」前掲注(25)でも、清衡自身が『後三年記』原本の本文作成に関与したとみるべき傍証三点を挙げ、野中説を補強した。

(43) 『後二年師通記』応徳三年十月二十九日条。

(44) 『為房卿記』寛治元年七月九日条。

(45) 同右、八月十六日条・十九日条。

(46) 腰滝口季方という人物は、後三年合戦の終結より二十余年の後、義家の没後に源氏の後継者争いが起こった際にもかなり重要な役回りを演じたりしいことが知られる。嘉承元年（一一〇六）七月に病没した義家の跡を嗣いだのは四男の義忠であったが、彼は天仁二年（一一〇九）二月、何者かによって暗殺される。義忠の死後、家督はわずか十四歳の義忠の嫡子為義が嗣いだ、義家の次弟義綱とその子息義明が義忠殺害の嫌疑をかけられ、義明以外の義綱の五子息は為義率いる軍勢に攻められ全員非業の死を遂げる。義明の乳父であった季方はその際、京にあった自らの宿所において義明を匿い、義明追討の宣旨によって攻め入った源重時と交戦、最後は義明と二人で自害し果てたという〔尊卑分脈〕義明伝。なお義忠を殺害した真犯人については、季方が義明の命に従って殺害を実行したように伝えるものもあるが（同

上）、季方のかつての主君であった義光が郎従鹿嶋冠者に命じて義忠を殺したと伝えるものもあり〔尊卑分脈〕義光尻付、どうやら真相は後者の方であったらしい（安田元久「源義家」吉川弘文館、一九六六年）。もしそうであるとすれば、季方のかつての主君義光の手になる謀略の犠牲者として最期を遂げたことになる。

